

「死んでいい」の遊びをめぐって



清水 哲

皆さんは、「死」という言葉からどのようなことを連想されるでしょうか。永遠の別れ、魂と肉体、天国と地獄、成仏、生まれ変わりなど、人によって、また国や宗教によつてさまざまだと思います。これから紹介するのは、一人の子どもと大人が「死」をめぐつて真つすぐに向き合つた、養護学校でのある遊びの話です。

六年生のN君が、四月のある日に突然始めたのが「死んでいい」の遊びでした。登校したN君は、かば

んをロッカーにしまる間もなくクラスルームのドアを閉め、電気を消し、カーテンもすき間なく閉めて、私と二人だけの完全な密室状態にしました。部屋の中は真つ暗です。それから彼はウルトラマンになり、私に向かつてビームを放つまねをしてきます。「よし、ウルトラマンごっこだな！」と思つた私は怪獣になつて応戦しようとしますが、「だめだ！ 死んでいい！」とN君。それでも立ち上がりつてウルトラマンごっこや相撲にもつていこうとしても頑として受け入れず「ダ

メだ！死んで！」と必死に訴え、至近距離で何度もビームを放つたり「バンバン！」とピストルで撃つまねをしてきます。それでもなお立ち上がりろうとするしつこい私のことを、最後は力ずくでなぎ倒そうとします。N君の絶対に譲らないという意志の強さに、私は抵抗することをあきらめ、覚悟を決めておとなしく

「死ぬ」ことにしました。

私がここまでN君の「死んでいい」の要求に抵抗したのには訳があります。一つは、N君の成長に伴う理由です。三年生の時に愛育養護学校に転入してきたN君。担任のことを頼りにしながら少しづつ安心して学校で過ごせるようになり、人間関係にもだいぶ広がりが出てきていました。そんな時期に、特定の大人と二人きりの閉じられた空間でほかの人に入つてこられるいような遊びをするなど、せっかく外に対し開き始めたN君の扉が再び閉じてしまうように思えたのです。もう一つは、私自身が八年前に父親を亡くしているこ

とにあります。それから死に対するイメージが「いなくなってしまう」「もう会えなくなってしまう」などネガティブなものになってしまったため、たとえ子どもとの間でのごっこ遊びだとしても、「死」に関係することはできるだけ避けたかったのです。

クラスルームの畳の上にあおむけに倒れている私が「死んだ」とことを確認すると、さつきまでの必死な表情は和らぎ、N君は早速、遊びの準備に取り掛かり始めました。タンバリンや鈴などの楽器や楽譜などの本をどつさりと抱えて持つてきは私の周りに置き、キーボードを用意して「フズン、ズン、チャ、ズン、ズン、チャ……」という軽快なドラム音をかけます。今度はタオルケットを持ってきて私の上に掛け、顔には白いタオルをそつと載せました。すると、タンバリンでわざと大きな音を出して「どうだ？」とニヤツとしながらこちらを振り返ります。ガバッと起き、「う

るさくて死んでいられないでしょ！　お静かに！」と私が言うとケラケラ笑い、「バン！」と擊つてまた私を「死なせ」ます。軽快なリズムが流れる中、このようないやりとりが何度も繰り返されました。「本当は死んでないんでしょ？」そんなことを確認しているようでした。

しばらくしてN君はCDの入ったかごや教材棚の引き出しなど、いろいろなものを持ってきては私の胸やおなかのあたりにせつせと載せていきます。「お供え物でこんもりと盛り上がっていて、まるで自分自身がお墓のようだな……」と心の中で苦笑いしていると、さつきまでのN君の楽しい雰囲気は一変し、「しみずの、ばか！」「もう遊ばない！」「あっち行け！」などと、急に怒り始めたのです。「何で死んじゃったんだよ！」という憤りを訴えているように感じました。すると今度は、「悲しいよ」と涙目になりながら私の顔の前で悲しみを訴え始めました。しばらく悲しみに向かいました。

暮れていたN君でしたが、だんだんと穏やかな表情に戻り「しみず、ありがとう！」とすつきりとした表情で言い残し、立ち上がったのです。

それからまた怒り、悲しみ、感謝をし……これを何度も繰り返しました。途中、その時々の自分の気持ちをノートに書きなぐって「死んでいる」私にそれを読ませたり、そのノートを私のおなかの上に載せたりして、再び自分の世界に入り込んでいきました。また、キーボードのリズムだけではなくミニコンポの前に座り、その時々の自分の気持ちや状況に合わせて選曲した曲をかけながら、この遊びを続けました。二時間ほど続けていましたが、すでに十二時を過ぎていたので「そろそろお昼ごはんを食べに行かない？」と、そつと目を覚まして声をかけてみると、N君は「いいよ」とすつきりとした表情で答え、すぐに部屋の電気をつけて片づけをし、何事もなかったかのように昼食へと

後で振り返つてみると、そこでN君が表現していたのは、大切な人の死に直面した時に、人がその死を受け入れていく過程そのものだったよう思えました。テレビなどでこういう場面を目にしたのかもしれませんが、表情はとても真剣だし、たんなるテレビドラマの再現とも思えませんでした。N君がなぜこの遊びを始めたのか。どうしてやろうと思ったのか。その時のN君の気持ちを察することはできませんでしたが、「死んでいる」時に私はいろいろなことを考え、思いをめぐらせていました。「死ぬってこういうことなのかもな」「もしかしたら、本当に自分はもうすぐ死ぬのではないか」本気でそのようなことを考えました。「でも、もし本当に死んだとしても、自分の死をこれだけ悼み、心から『ありがとう』と言つてくれる人がいたらきっと幸せなんだろうな」そんなふうにも思いました。こんなに思つてくれる人がいる自分は幸せ者だなあと、しみじみと感じながら「死んで」いました。

「N君、こちらこそありがとうございます！」そんな気持ちでいっぱいでした。

後日、この話をほかの職員と振り返る機会がありました。その職員は「N君はその遊びを、いま、あなたとやることに意味があつたのではないか」そして、「怒り、悲しみ、受け入れ、感謝しているのは、ほかでもないN君自身だったのではないか」そのような感触を聞かせてくれました。私たちの学校に転入してきたのはN君本人がこの学校のことを気に入つたからですが、おそらく前の学校にも好きな友達や先生がいたはずです。また、転入してすぐに出会い、N君が大好きになつたある職員は、その後、体調を崩し長期的に休まざるを得ない状況になつてしましました。このようN君は、自分にとつて大切な人の喪失体験を何度もかかしてきました。しかも、それらは自分の気持ちとは関係なく、相手の都合や外的な要因で離れ離れにさせられてしまうものでした。そんな中、安心して自分を

表現できる相手として関係を築き始めた私と、この遊びをすることはN君にとつて必然的なことだったのだと思います。大切な人との別れ（＝死）をN君自身が主体的に行うことで、これまで受身的に自分のもとに降り掛かってきた悲しい体験を能動的にとらえ直し、いま、目の前にある大切な関係性を再確認しようとしていたのかもしれません。「死んでいい」の遊びはこの後もしばらく続きましたが、この遊びを徹底的にすることで何かを得、そこで得たものがいつか必ず実を結びN君の力につながるはずだと思い、納得するまでN君がこの遊びをやりきることができるように、気持ちよく「死んで」ということにしました。

二学期に入つてからも時どきこの遊びを誘つてくることはありましたが、緊張感はほとんどなくなりました。「おねがい、死んでー」とものすごく甘えた感じで頼んでくるので、頼まれた私のほうの調子が狂つてしまします。最近ではビームやピストルで私を「撃ち殺す」ことはほとんどなくなり、テレビアニメ「名探偵コナン」の主人公である江戸川コナン君になりきり、「腕時計型麻酔銃」を撃つまねをして「眠らせる」ようになりました。ぬらしたタオルをギュッと絞り、「眠っている」私の腕やおなかをそつと拭き、優しく介抱してくれたりもします。麻酔が切れたからと言つて私が起き上がると、もう一度眠らせようとするN君と取つ組み合いになることもありますが、今までN君と取つ組み合いになることもありますが、今まではそれ自体が楽しい遊びになつています。

子どもは、大人の都合や社会的常識などにより、受動的な体験を余儀なくさせられてしまうことも少なくありません。しかし、子どもも大人と同様に、自分の人生を生きていく尊い存在であることには変わりはありません。子どもにとつて遊びとは、受動的な体験を能動的にとらえ直し、納得して次へ進んでいくための大変な舞台という意味合いもあるのかもしれません。子

どもが「やりたい！」と強く願う遊びは、大人にとつて（おそらく子ども本人にとつても）その時には意味がよくわからなくとも、絶対に必要なことなのだと思います。

二人で外に出かけた十月のある日のこと。ちょっととふざけていたN君が、私のかばんを階段の途中から下に落としまいました。「何でそういうことするの！」と私が怒ると、N君も「しみず、もうあっち行け！ 出て行け！」と怒りをあらわにし、一定の距



離をとつて歩き始めました。駅のホームで電車を待つている時にも私とは別のドア位置で待ち、電車の中でも離れて立っていました。互いにひと言も発せず、一度も目を合わせません。三十分以上もそのような状態が続き、結局私のほうから「さつきは強く言い過ぎちやつたね。ごめんね」と謝りました。するとN君も「うん……いいよ」と納得して仲直り。N君をおんぶし、学校までの登り坂をゆっくりと歩んでいきました。「そういえば、N君とけんかをしたの、初めてだ！」そのことに後で気づき、誰かとけんかができるまでにN君がたくましくなったこと、そしてN君自身がそれだけの関係性を育む歩みをしてきたことに、大きな喜びを感じました。これから先も、N君にとつて大切だと思える相手に出会い、自分の正直な気持ちを伝えることのできる関係性がさらに育まれていくことを願っています。